

木古内町

山下尚也

1. 地名の由来と歴史

『木古内』はアイヌ語で高く昇るの意味を持つ『リコナイ』や、潮の差し入る川の意味を持つ『リロナイ』が由来だといわれている。

木古内の歴史としては、今から約 570 年前の 1433 年に和人がやってきて以来、木古内は徐々に発展を遂げてゆく。1799 年幕府の直轄地になり山本長右衛門が名主となった。1855 年に健有川以東を幕府が再直轄し過去立て奉行所の管理下におかれる。1858 年には大友亀太郎・新妻助惣が開墾農夫取立方として木古内村開墾取扱を命ぜられる。明治に入った 1869 年、木古内周辺は戊辰戦争の戦場となり、その後この地域に蝦夷開拓使が設置、されに役職が置かれ町村統治が始まる。1879 年には瓜谷と合併し木古内村となり、1880 年からは小学校、警察署、裁判所の設置や釜谷の編入など目まぐるしく発展が進む。1902 年に 4 か村を木古内と称し、2 級町村制、1916 年には 1 級町村制が施行された。1930 年には鉄道が開通し、1942 年からは町制に移行した。JR 木古内駅は、1988 年の青函トンネル開通により北海道の玄関口として本州から津軽海峡線に接続する在来線最初の駅となった。1998 年には北海道新幹線木古内駅の設置も決定した。

また、産業的なものとしては 1897 年に集乳所が設立され、1918 年に練乳バターの製造が始まった。その練乳会社は 1933 年に明治製菓経営に乗り出した。

他にも 1910 年には前田家が林業を開始した。その影響かどうかははっきりしていないが、スギの木は木古内町の木となっている。ほかにも漁業が盛んである。

2. 地理・気候

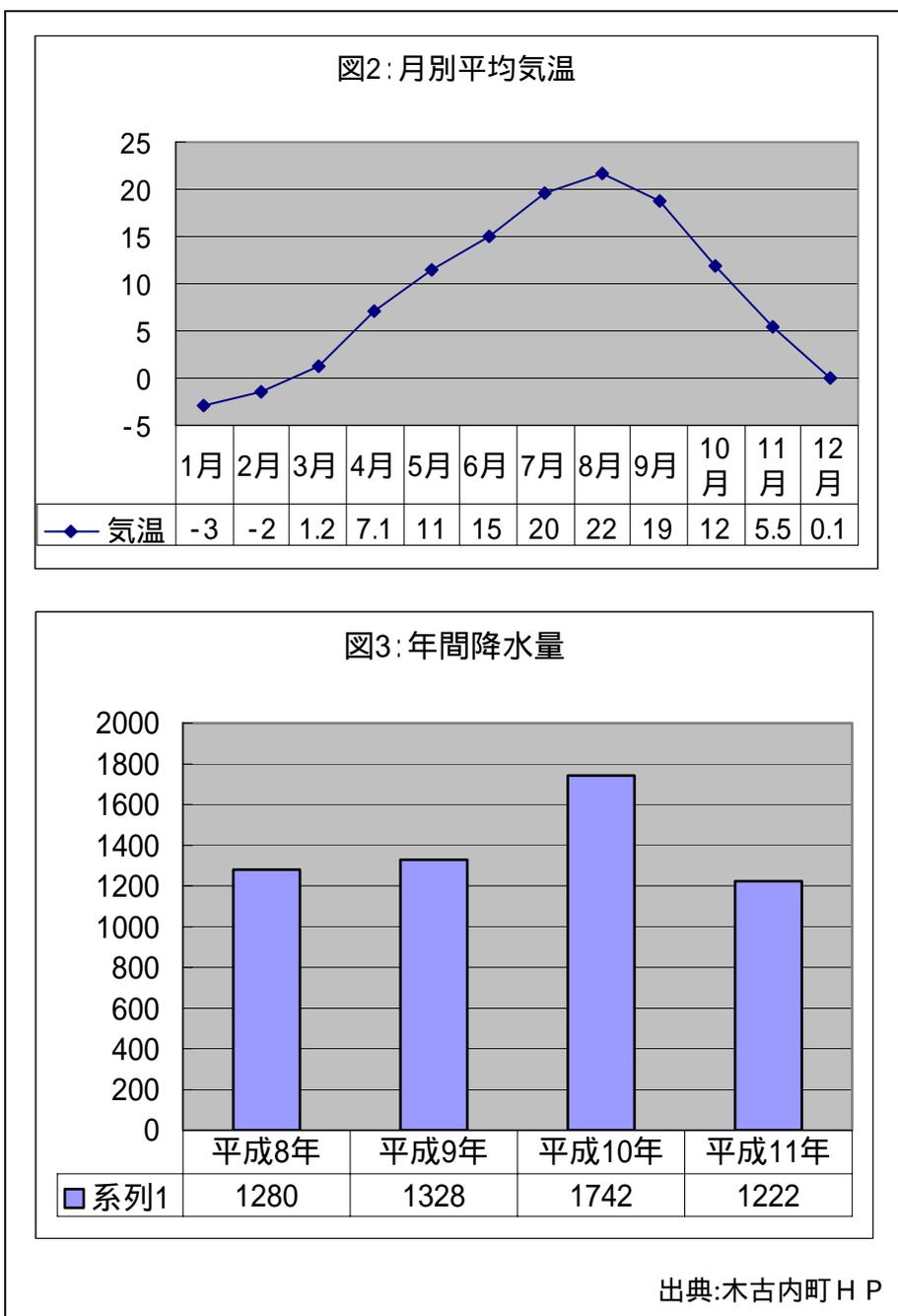
2.1 地図上における位置

東経 140 度 25 分、北緯 41 度 35 分、北海道の南側、渡島半島の南西部に位置し津軽海峡に面している。面積は 221,88 km²。市街地の平野部以外は大体の場所が山岳地帯である。交通の要衝であり国道 288 号線、江差線、海峡線などの道路が通っている。木古内駅は青函トンネルが開通後、特急電車も止まる駅になった。

隣接する市町村には北斗市、知内町、上ノ国町、厚沢部町がある。



2.2 気候



左のグラフ図2・3からわかるように、平均気温が最低で1月の-2.9と北海道には温暖である。また、最高でも8月の21.7と冷涼で過ごしやすい地域となっている。そして降水量も平成10年に1700を超えたこともあるこの地区では、水稲を基幹作物として酪農・肉用牛・野菜の組合せにより複合経営による農業の振興が図られてきた。

3. 人口・世帯数推移

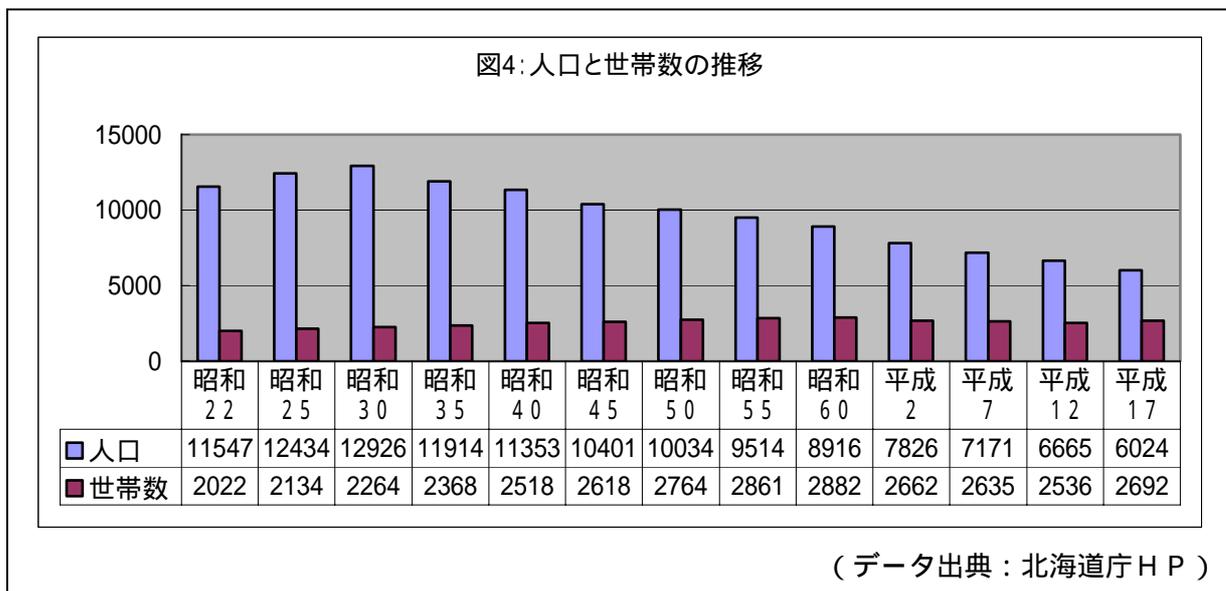
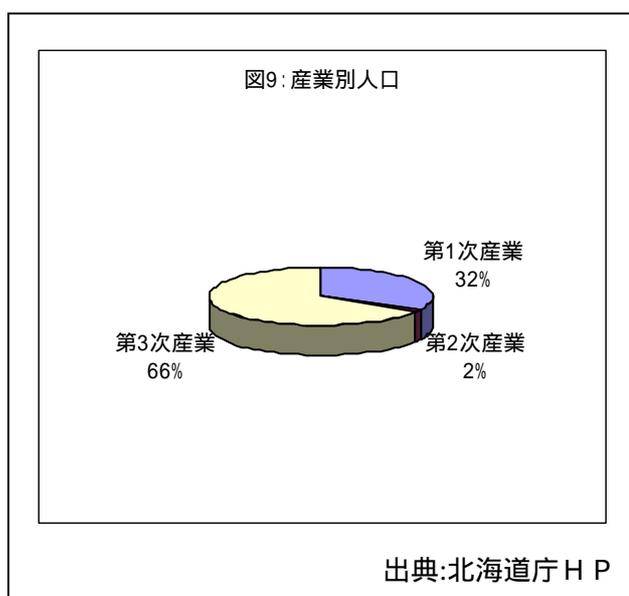


図4は人口と世帯数の推移のグラフである。人口のピークは昭和30年の12926人が最大であり、それ以後は減少の一途をたどり、平成に入ってから5年ごとに約500人ずつの減少が見られる。世帯数はと言うと、昭和60年の2882世帯が最高であるが、人口は減少しているのに対し、こちらは目立った減少も無く割りと安定しているのは、核家族の世帯が増えたからであろうか。また、45歳以上の人口が全体の半数以上を占めている。

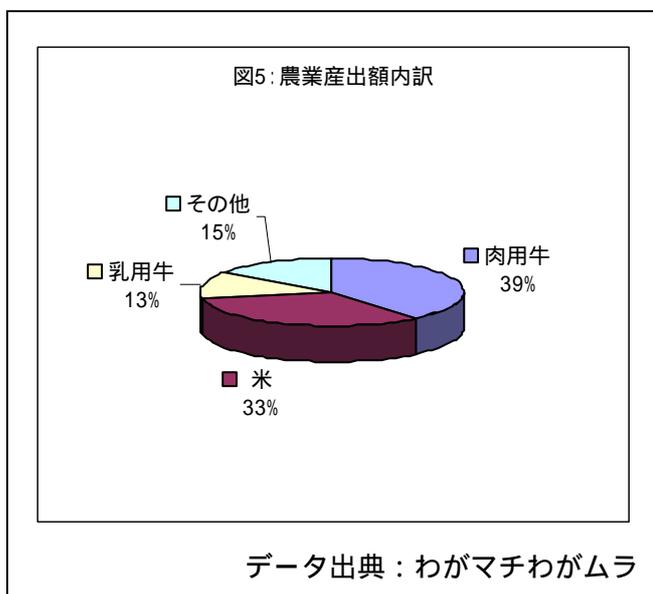
4. 産業

4.1 産業別人口



平成17年度渡島支庁の調査によると、農業従業者数は135人、漁業従業者数は60人で所属団体は漁協が1つとその他もう1つ。商業従業者数は399人で、うち卸売業者が6人、小売業者が382人となっている。工業従業者数はわずか13人、全体のたった2%しかいないことは木古内町の特異な点である。この地区でも第三次産業者の人口が全体の3分の2を占め、日本全体における第三次産業者の比率とほぼ同程度である。ここでもサービス経済化が進んでいる。

4.2 農業



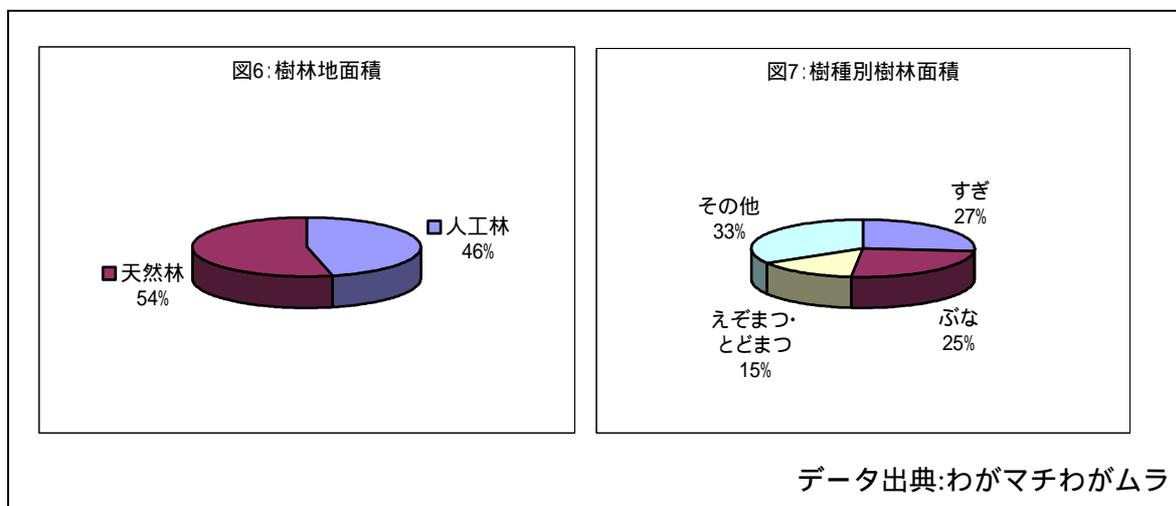
左図は木古内町の農業算出額の内訳である。

農業の中心となっているのはこの木古内町の気候を生かした酪農と稲作である。牛だけで全体の半数、米も加えるとこれだけでこの地区の農業の8割を超えている。

その他の内訳としては、いも類、野菜、種苗・苗木類が中心となっている。

産出額の総額は8億4千万である。

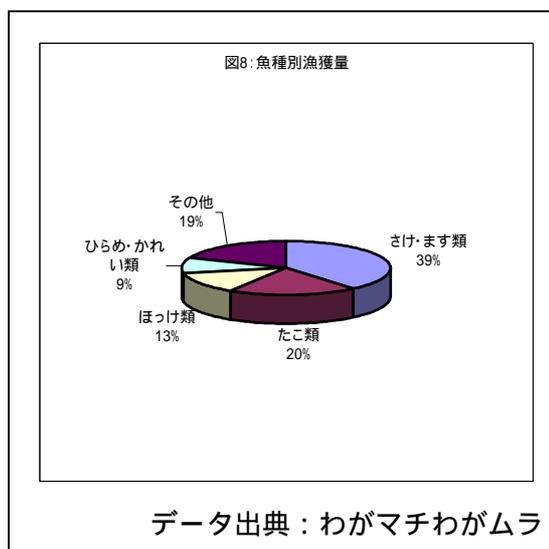
4.3 林業



上の図6・図7は木古内町の樹林のデータである。林業は1章でも少々触れたが、1910年からこの土地に住んでいた前田家が最初に始めたものである。樹林地の面積は人工林は8996haで多くはすぎやえぞまつ・とどまつが占めている。天然林は10430haでもともと道南地方で生育しているぶなが大半を占めている。樹林別に見ると木古内町の町木であるすぎが27%を占めている。木古内町は、すぎ分布地の北限に位置し、そのすぎは本州産に比べて年輪の間隔が狭く、質の高い木材が取れるという。しかし林野の面積は徐々に減少していることを示すデータもある。

4.4 漁業

この地域は、地域の活性化をするべく隣の知内町などとも連携し活動をしている。漁獲量の総計は 582 t である。函館市や福島町では漁獲量の大半はイカが占めているのだが、この木古内町と隣の北斗市ではさけ・ますが漁獲量の約 4 割を占めるなど、よく獲ることができる。この点を利用してさけ・ますのつかみ取りなどのイベントを行うところもある。



5. 木古内町の特産品



木古内町の特産品はそれぞれこの土地の特徴をいかした米やスギの木などを使った商品が中心となっている。以下では図 11 の左の商品から紹介する。

『みそぎの舞』

木古内町産米『ほのか 224』を姉妹都市の山形県鶴岡市の富士酒造へ醸造を依頼、平成 2 年から町内の酒販店のみにて限定販売している。年 2 回に分けて販売されるが、いつも売り切れとなるため『幻の酒』とも言われる。

『はこだて和牛』

別名『あか牛』とよばれている褐毛和種牛で、原産地は熊本県。特徴としては、肥育期間が短いため黒毛和種より低価格で購入できる。はこだて和牛のブランド名で販売されているほとんどが木古内町での生産である。

『木古内米めん』

原料に木古内町産をはじめとする北海道産米を使用し、ながいも、ホタテ、ひじきを練り込み、米めんの斬新な食感と海と山の3種類の風味を味わうことができる。

『木材工芸品』

木古内町はスギを町木とし木目が美しいと評判なため、地元のスギに付加価値を高め、「箸・木材工芸品生産センター（木工センター）」を町直営で運営し、高級天削箸（割箸）カレンダー、おしぼり置き、ティッシュケース等の木工品が特産物となっている。

6. 観光

春には薬師山の芝桜、夏には漁火、秋には紅葉、冬には寒中みそぎ祭りと1年中を通して四季折々のイベントごとを楽しむことができる。

ちなみに薬師山とは木古内町の市街地の近くに位置している山である。また、冬のイベント「寒中みそぎ」が始まったのは1831年で、以来、行修者と呼ばれる4人の若者が1月13日から佐女川神社に籠もり、昼夜問わず真水で何度も自身の身体を潔め、毎年1月15日に別当・稲荷・山の神・弁財天の4体の御神体を抱き、厳寒の津軽海峡に飛び込み、その年の豊漁・豊作を祈願する伝統行事として引き継がれているものである。

木古内町の観光客数は33000人であり、渡島管内を訪れる観光客のたった0.3%を占めているにすぎない。前年比は112%であり、若干の増加がみられる。

図 11：木古内町の観光



出典：木古内町HP

参考HP

北海道庁HP :

<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>

渡島支庁HP :

<http://www.oshima.pref.hokkaido.lg.jp/index.htm>

木古内町HP :

<http://www.town.kikonai.hokkaido.jp/info-kikonai3.htm>

わがマチわがムラ :

<http://www.toukei.maff.go.jp/shityoson/map2/01-01/334/index.html>

ウィキペディア :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E5%8F%A4%E5%86%85%E7%94%BA>